

ちょっと未来の「ロボットのいるライフスタイル」を研究する

東京大学先端科学技術研究センター 高橋智隆研究室

「クローン」、 「FT」、最近では「ROPID」などのロボット作品で著名なロボットクリエイターの高橋智隆氏が、今年一月から東京大学先端科学技術研究センター（東大先端研）に特任准教授として着任し、駒場にある東大先端研内で研究室を構えている。ロボット製作を行えるスペースもある本格的な研究室だ。これまでも京都大学入居ベンチャーである株式会社ロボ・ガレージ代表取締役社長のほか、大阪電気通信大学総合情報学部メディアコンピュータシステム学科客員教授、福山大学工学部電子ロボット科客員教授、ヒューマンキッズサイエンスロボット教室アドバイザー、ロボット専門店ロボベース顧問など多彩な肩書きを持つ高橋氏。新たに東大先端研という場で物理的なスペースを得て、どんな研究を行うのか。内装を終えたばかりの真新しい研究室にお邪魔した。

もりやま かずみち
森山 和道（サイエンスライター）

表はお洒落空間、 裏では作業場所の研究室

まずは、「高橋研究室」がどんなところなのか紹介しよう。

ノックして研究室のドアを開けると、間接照明で照らされた「高橋研究室」のロゴデザインがあらわれた入口が迎えてくれた。洒落た歯医者かカフェのような趣きだ。

その奥には白いソファが置かれていた。来客が多いため、打ち合わせブースに入る前に一時滞留するための一角である。白い壁には模様があしらわれていた。

ソファの下をのぞいてみると、掃除ロボットのRoombaが置かれていた。Roombaには茶色の皮が張られていた。これももちろん手製とのこと。自他ともに認める「モノフェチ」である高橋氏らしい意匠である。

さらにその奥が打ち合わせブースだ。茶色の仕切り壁に白いテーブル、「wakamaru」のデザイナー喜多俊之氏デザインの白い椅子と至ってシンプルな構成だ。壁にはPanasonicの「EVOLTA」で

獲得したギネス記録の認定証などがかけられていた。ラックに置かれた雑誌類は、高橋氏が取材された媒体類である。

話は基本的にこの部屋で伺ったのだが、洒落た壁のすぐ向こう側は作業場所である。床には部材や電動ドリルや金床、ダクトテープなどの工作道具、おまけに掃除機などが散乱し、部屋の隅にはすでに仮眠用のベッドが置かれていた。壁一面を埋めた整理棚にはすでにさまざまなパーツがおさめられていた。名札が張られていなかったが中に何が入っているかは、「意外と分かる」らしい。

うっかり部品などを踏まないように気をつけながら床に目を落とすと「ROBO GARAGE」と刻まれた部材があった。ロボット用のキャリーバッグを製作中とのことだった。机の上には各種電動工具なども一通り設置されていた。

部屋のドアを開くと、塗装を行うための小部屋だった。ラッカー類なども棚に納められていた。このほか水道が使える部屋も研究室の中にあり、ないのはトイレくらい

のもので、「ほとんどのことがこの部屋で行える」とのことだった。

先端研の特任准教授という立場には学生を指導する義務はないので学生はいない。高橋氏はこのスペースを一人で使っている。

なお、高橋氏が代表を務める法人である株式会社ロボ・ガレージの活動自体は、今でも京都大学を拠点に行っている。東大先端研の研究室は、あくまで高橋智隆氏個人が構えて行っているという位置づけだ。これまでの仕事先や、ものづくりにおける関西の人脈も多く、京都と東京とを頻繁に往復する生活が続いている。

ロボットがつなぐライフスタイル

この部屋で高橋氏はどんな研究をするのだろうか。「基本的にはこれまでと変わらない」という。すなわち、私たちとロボットが関わる少し先の未来生活のデザイン、それが研究のテーマだ。オリジナル作品として作られていたロボット製作を研究として行うことになる。すでに腹案もあるという。

高橋氏の研究室は、東大先端研の福島研



高橋研究室の入口。大学の研究室とは思えないお洒落な空間。



インタビューに答えてくださっている高橋さんの後ろの壁には「EVOLTA」で獲得したギネスの認定証（右）や、ロボカップ世界大会で獲得したルイ・ヴィトンカップの写真が飾ってある。



奥に入ると作業場所。床には工具や部品、素材などが散乱しているのはさすが、ものを作る方の部屋。奥には仮眠用のベッドまである。